

Newsletter 46

慶應義塾大学教養研究センターニュースレター第46号/2025年5月15日発行

Contents

巻頭言

- 特集Ⅰ 「基盤研究」「実験授業」
特集Ⅱ 「教養研究センター選書」
特集Ⅲ 【教養研究センター 設置科目】
アカデミック・スキルズ／身体知・音楽／ゲーム学
特集Ⅳ 「日吉行事企画委員会（HAPP）企画」
特集Ⅴ 「創造力とコミュニティ研究会」
「教養の一貫教育」「学習相談」

活動予定

私の〇〇自慢



欧州原子核研究所（CERN）所内の宿舎から
実験建屋までの道のり

「自分の頭で考える人財は組織に根付くか」

教養研究センター副所長
寺沢和洋（医学部）
Kazuhiro Terasawa

もう20年以上前になりますが、修士1年の時に外国へ行く機会を得ました。当時、日本ではできなかった実験を外国の研究施設で行うためです（右上写真）。実際には、2～3人の修士2年の先輩が候補でしたが、就職活動中のため行くことができず、後輩の自分に話が回ってきたのです。

就活といえば、企業の採用担当の方と話すと、どんな学生さんに来てもらいたいかという話題になり、「組織に馴染みながらも、自分の頭で考えて自主的に行動できる人財がよい」という旨の意見に対して、NOという人にまだ出会ったことがありません。とすると、大学内において、その「自分の頭で考えて」に該当する最たる機会は3、4年次の卒業研究・ゼミといってよいでしょう。ただ、そのプロセスの完了を待たずに就活は始まってしまいます。いわゆる大学の空洞化です。

企業側も「自分の頭で」について、さほど問うていないように感じられます。研究室にも依りますが、できるかできないかやってみなくてはわからない研究（だからこそ研究である！）をやって、一定のqualityを伴う結果がでなければ、卒業（修了）できません。当時、参加していた実験は学年が詰まっていて、1年でしかるべきupdateを達成しなくてはならず、しかも修士2年の4月から6月まで再び渡航していたので、正直かなり焦っていました。外国での実験は博士後期の先輩の実験でもあり、それを修論の

ネタにすることは全く考えておらず、そんな中、修論を賭けた12月の実験の恐ろしさは未だに忘れられません。幸か不幸か、一般企業への就活は行っていませんが、もししていたとしても、アピールできる機会はありません。

とすると、例えば大学受験合格という結果だけでもって、一旦、就職してしまい、必要に応じて大学に戻る仕組みにした方がよいとすら思えてきます。大学で学ぶことがプロセス的なことも含め、社会に出てどう役に立つのか、関連していくのかも、時としてわかりにくく、一旦社会に出てからの方がわかりやすいし、足りないところも見えてくるはずです。

また、「自分の頭で」を達成できている人は、そもそも、会社組織等に就職する、雇われる必要もありません。自分で動けるのですから。そういう人財を求めているとしたら、完全なジレンマでしょう。更に、「できる奴ほどやめていく」という現象にも歯止めがかからないかもしれません。

タイパ・コスパを考えて、自分に降ってきた仕事を必要以上にやろうとしない若い社員も増えていると聞きます。ただ、その組織にとどまって仕事をしていることこそが、タイパ・コスパが悪いことなのかもしれません。

組織人になると、何か意見があっても、(1)その人個人の意見なのか、(2)組織の中での立場が言わせているのか、についてはわかりにくく、村山富市さんが首相になっても社会主義の国にはなっていませんが（後者なので）、(1)と(2)がイコールでなくなってきた時が、組織にとどまるのか、外に出るのかを考えるタイミングなのかもしれません。

後述の実験授業「金融リテラシー入門」はそんなことも念頭に置いて、取り組む講座になりそうです。



基盤研究

文理接続プロジェクト

2024年度の「文理接続研究会」は、「人工」を新たな共通テーマとして定め、3回のゲスト講演と4回のワークショップを行いました（3回目のゲスト講演と1回目のワークショップは同日に開催）。昨年度まで年に10回程度行ってきた小規模の研究会の回数を減らし、その分、半日または終日開催のワークショップの回数を増やして、活動をより集中的なものにしました。

春学期に行われた3回のゲスト講演のタイトルは以下の通りです。①大澤博隆さん「人工知能と想像力の拡張：他者の知能から想像力の知能へ」、②杉浦孔明さん「AI研究における人工アプローチ」、③藤原慶さん「生命科学・化学にみられる多様な階層の人工細胞」。

これらの講演をきっかけにしつつ、参加者各自の専門分

野と関心に基づいて、年度末までに論考集『接続』第

3号（2025年4月発行予定）への掲載論文を作成することを前提に、各自が考察を積み重ねました。8月2日に10名の参加者が論考の計画発表を行った後に、9月28日と12月14日に中間発表、3月1日に最終発表を行いました。3月末までに、文系・理系の多様な分野の研究者による論考集を完成させる予定です。

研究会の活動は随時ブログで公開・更新しており、2022年度、2023年度の成果である『接続』第1号、第2号も閲覧できます（<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/bunri/>）。

（荒金直人）



実験授業

情報の教養学（2024年度秋学期）

2024年度秋学期の「情報の教養学」では、2件の講演を実施しました。

まず、大澤博隆氏（理工学部准教授）は、ヒューマンエージェントインタラクション（HAI）、そして物語（特にSF）の応用に関する講演をしました。HAIは知能がどう動くのではなく、人間がどう受け取るかを重視しており、医療や教育など様々な方面で応用されていることを解説しました。また、SFがヒントとなって、宇宙開発やロボットなど様々な分野を生み出してきているプラスもある反面、それにより偏見が生まれる危険を指摘しました。最後に、ご自身が代表となって活動されているSF研究開発・実装センターを紹介しました。

次に、北村崇師氏（国立研究開発法人産業技術総合研究所 主任研究員）は、AIを

用いた意思決定アプリケーションでは、差別が起きていることを、例をあげながらも説明し、そしてなぜAIを用いると差別が起きるのかを解説しました。差別をなくし、公平にするのはよいのだが、「公平」そのものは簡単に定義できない、と議論しました。それを踏まえた上で、差別をどう検知するのかなど紹介しました。

いずれの講演も参加者は興味深く聴講し、質疑も活発でした。2025年度は、春・秋を通して6件の講演を実施する予定です。

（高田眞吾）



「金融リテラシー入門」

2025年度秋学期より教養研究センター設置科目として、SMBCグループ寄附講座「金融リテラシー入門」を月曜5限に開講致します。2024年度はその開講に先駆けて、4回の実験授業を実施致しました。4回の各日程・内容は以下の通りです。

11月29日「ライフプランを設計する」

12月2日「金融商品・サービスを活用する」

12月6日「金融トラブルを回避する、リスクに備える」

12月9日「資産形成・資産運用の基礎を身に着ける」

各回とも20～40名程が受講し、おそらく個人的な内容の質問も絡むことから、全体の時間での質問よりも、終了

後に講師に個別に質問する多くの学生さんの姿がありました。アンケート結果から、どの回もほぼ90%以上の受講者から満足との回答を得ました。2025年度に向けて手応えを感じています。シラバスにも記述していますが、年金受給だけでは老後の備えが十分でないことが明確になっている昨今、金融リテラシーは、どのような生き方をしたいのか、いつまで働くのか、会社人・組織人として生きるのか個人で立ち振る舞って生きるのかという問いにも直結します。秋学期に多くの学生からの受講を期待しています。

（寺沢和洋）



<選書刊行記念企画>著者と読む教養研究センター選書 第4回

一冊の本が新たなお喋りを媒介し、賑やかな会話は新たなつながりを生み出します。『文芸共和国の歩き方』出版を契機として、日吉で行われてきた／行われている「生き生きとした会話の響き」が一つの教室を越えて、キャンパスを跨ぎ、あるいは大学の外にも広がっていただきたいと思います。今回の企画においても、自著解説をするというよりは、この本を手がかりにして日吉という場を語る、普段は会う機会のない人たちと言葉を交わしてみる、という点にフォーカスしました。当日は日吉所属の文学部、法学部、医学部の学生さんに加えて、三田からも文学部の2年生・4年生たち（卒業を控えたかつての教え子が二人!）も来場してくれました。

日吉専任者では教養研究センター関係者に加え、中国

語・イタリア語・韓国語といった語学分野の同僚、人文分野では歴史学の専門家、さらには退職された名誉教授の先生など、来場者の多様なバックグラウンドに支えられ、話が弾みました。広報に際しては、日吉美術研究室のデザインセンスと経験蓄積に助けられました。『文芸共和国の歩き方』に響く声は、私自身の声でありつつ、こうした本をめぐる会話の声でもあり、出版を契機として「これから」生まれるであろう未来の賑やかな声も含んでいます。

(若澤佑典)



教養研究センター選書25／26

『悪の花』の旅 — ボードレールを読む

ボードレール『悪の花』は19世紀ヨーロッパの精華とも言えるべき詩集です。日本には多くの訳業と世界的水準の研究の蓄積がありますが、今や、文学に興味をもつ学生でさえ読むには敷居が高いと感じるようです。この詩集、もっと言えば西洋の詩全体が日本の文化的風景からほとんど消えている。これはたいへん残念なことです。『悪の花』は

近代に生きる私たちが情動の共振を得ることができる、唯一無二の詩集なのです。

この小冊子が試みているのは、もはや詩の感動が容易に伝播してゆかないこの時代であるからこそ、ボードレールの世界へとこちらから接近して行こう、という、ある旅への誘いです。

(原 大地)

「韓国の若者と徴兵制」

韓国の漫画喫茶で偶然手にした「ドラゴンボール」の面白さに魅せられ、日本への留学を決めたのは30数年前のことになります。来日した日、電車の窓越しに見えた景色は韓国と似ていて、未知の世界に対する不安が和らぐと共に親近感を感じたことを覚えています。しかし、日本での生活に慣れてきた際、韓国なら普通に目にするある風景が日本の日常には存在しないことに気づきました。若い兵士た

ちの姿です。休戦状態の韓国では徴兵制が実施されており、男性は軍隊に行くことになっているので、大学のキャンパス内で休暇中の兵士に出会うことも不思議なことではありません。韓国の若者にとって最も重要なキーワードとも言える徴兵制への理解を深める旅を、これから始めてみませんか。

(金 柄徹)

《2025年度教養研究センター選書 原稿募集》

教養研究センターでは、2003年度以来「教養研究センター選書」を刊行しております。この企画は、当センター所属の研究者が、その学術研究の成果の一端を、学生を中心とする一般読者にいち早く発信して新鮮な知の一石を投じ、研究・教育相互の活性化を目指そうとするものです。

■応募資格：教養研究センター所員（共同執筆も可）

■内容：研究分野は問わない。学術論文とは異なる啓蒙的な切り口で、先端的研究成果を紹介し、学生や一般読者に新鮮な知の形成に立ち会う機会を提供するもの。

■申込締切日：2025年8月末

■原稿提出締切日：2025年9月末

●詳細は別途所員宛にご案内いたします募集要項をご確認ください。

※締切日につきましては変更になる可能性があります。



教養研究センター設置科目

アカデミック・スキルズ／身体知・音楽／ゲーム学



コンペティション入賞者一覧

■論文コンペティション

賞	氏 名	学部・学年	タイトル	クラス
大賞	伊藤 希優	経済・2	岡倉天心の日光東照宮批判について—天心の政治性に着目して—	木曜・3限
金賞	永田 仁子	文・1	トラウマの社会学的考察—「領域交差」を通じた脱構築の可能性—	木曜・3限
	間瀬 春佳	法・1	日本の刑事裁判と窃盗症患者	木曜・3限
	川田 湖雪	法・2	インターネットにおけるフードファディズムの現状—Googleトレンドを用いた分析を中心に—	木曜・5限
銀賞	白子 舞佳	経済・1	日本の「地方芸術祭」と1960年代の学生運動の関連—北川フラムの思想から見る日本の芸術祭創世記—	木曜・3限
佳作	吉村 麻衣	経済・1	アンパンマン玩具ビジネスの成功要因	木曜・3限
	山田 一斗	法・1	法教育の現状における国の果たす役割	木曜・3限
	吉清 綾乃	文・1	脱・宣伝頼み—「君たちはどう生きるか」からみるコンテンツ産業での「ゼロ宣伝戦略」応用可能性—	木曜・5限
	渥美瑠之輔	総合・1	民間企業主導の公共交通再編とその後の取り組み—阪神バスを事例として—	木曜・5限

■プレゼンテーションコンペティション

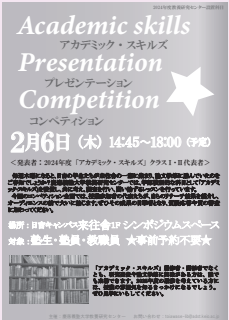
賞	氏 名	学部・学年	タイトル	クラス
金賞 教員特別賞	間瀬 春佳	法・1	「更生」の観点から見る、日本の刑事裁判と窃盗症患者—現在の日本で窃盗症 患者は更生できるのか—	木曜・3限
金賞	白子 舞佳	経済・1	芸術祭はなぜ地方へ向かうのか—1960年代の学生運動との関連—	木曜・3限
教員特別賞	吉清 綾乃	文・1	「ゼロ宣伝戦略」ってなにもの?—「君たちはどう生きるか」における「ゼロ宣伝戦略」分析—	木曜・5限
銀賞	永田 仁子	文・1	トラウマの社会学的考察—「領域交差」の実践を通じた脱構築の可能性—	木曜・3限
銅賞	渥美瑠之輔	総合・1	プラットフォーム行政—公共交通と行政の新たな関係—	木曜・5限
佳作	石川 七愛	理・1	議論が難航する名古屋城天守のエシペーター設置問題	木曜・3限
	松村 歩	文・1	宝塚歌劇団の雇用契約—制度継続理由の検討—	木曜・3限

※学部・学年は2024年度時

アカデミック・スキルズ（木曜2時限クラス） 逆立ちして学問と出会う

思考の端緒は日常の中に隠れています。例えばキャンパス内に展示された土器を見て、古代の日吉について思い巡らすこと。日吉メディアセンターの前に立って、知の収集・分類・廃棄について身体的に感じ取ってみること。銀杏並木を歩きながら、身の周りの形や色彩に注意してみること。木2クラスを立ち上げるにあたって、学生のみなさんには「人工的な思考のツールを習得する」というよりも「すでに自分の中にある発想・創造のスタイル」が発見できる授業を目指しました。既存のアカデミック・スキルズを「ひっくり返して」みることで、新しい授業のかたちを試行

したわけです。発見術としての学術探究、創造行為としての執筆・発表活動に力点を置きました。学問とはかくれんぼであり、知の技法とは「逆立ちして自分を、日常を、世界を眺める技なのだ」と語り直しました。逆立ちを教えるにあたって、私自身が教室で「実際に逆立ちしてみた」ことは本授業のいい思い出です。



（若澤佑典）

アカデミック・スキルズ（木曜3時限クラス）

内容は第2時限と違い、第5時限とは同じく、正攻法でクラシックなアカデミック・スキルズです。春学期は4,000字、秋学期は8,000字の論文執筆を最終目標とし、口頭発表もしていただくかたちでした。教員は、縣由衣子（法学部・文学部・教養研究センター）、片山杜秀（法学部）、玉木寛輝（教養研究センター）、諸橋英一（同）の4名。TAとして高梨愛優さん（経済学部3年）にご活躍頂きました。履修者は春学期には20人前後を保ちましたが、秋は例年のパターンを踏んでしまって減り、最終的には8人でした。通年で鍛えるのがこの授業の昔からのやり方ですが、秋学期だけの履修者も複数いて、成果は十分だったことを付け加えます。とにかく秋の学生さんたちは例年にも増して熱心で、少数授業の醍醐味を教員としても味わわせてもらいました。

アカデミック・スキルズ（木曜5時限クラス）

2024年度も教員3名の体制で、複眼的な視点からの指導を提供できたものと自負しています。従来、最大の履修者数を24名としてきたところ、春学期は50名近くが履修を希望し、31名を受け入れることになりました。グループワークは例年以上に充実し、授業の前後も含めて賑やかで活気のあるクラスとなりましたが、秋学期の継続履修者は1名のみで、新規の履修者が3名加わるという展開となりました。当初の想定とは異なりましたが、春・秋と連続で履修した1名の研鑽は見事で、年度末ころには教員も目を見張るほどに能力を高めてくれましたし、新規の学生たちも、心理的ハードルをさほ

なお、この場で、アカデミック・スキルズ全体の統括者として報告いたしますと、同じ曜日で3クラスを開講したのは20年以上の授業の歴史の中でたぶん初めてかと思うのです。クラス間の連絡がよくなって、クラスの面があったと思います。年度末のプレゼンテーションと論文の両コンペティション、さらに打ち上げのパーティも、寄付元の小佐野弾さんにもご参加賜わって、賑々しく挙行されました。関係各位に感謝いたします。



（片山杜秀）

ど設けずに、ある程度自在に授業に参加してくれたようです。通年履修の制限が外れて以降、持続的な履修者をどのくらい確保できるかは一貫した課題ですが、本年度のようなあり方も、ひとつの可能性だと感じています。春学期は、半期でわいわいやって満足した（お腹いっぱいになった?）学生がほとんどかもしれませんが、期間を区切って学ぼうとするスタンスも、悪くはないのかもしれません。他方、秋学期は、新規履修者もちろん含めて少数精鋭の真剣さが際立ち、成果も濃密なものとなりました。

（石川 学）

身体知・音楽

2024年度の教養研究センター設置科目「身体知・音楽」は、新型コロナウイルスの感染拡大が懸念された2020年度以前の状態に完全に戻り、対面で授業が実施できなかった半年が、はるか遠い昔のように感じられるのが不思議なくらいです。結果的に2024年度は、これまで同様2つの授業を「身体知・音楽」の下で開講しました。一つは「古楽器を通じた歴史的音楽実践」であり、他方は「合唱音楽を通じた歴史的音楽実践」でした。授業の成果発表演奏会については、慶應義塾大学古楽アカデミー・室内アンサンブルの演奏会を春学期に戻して6月30日に行いました。ここ数年この室内楽の演奏会は秋学期に催していましたが、2019年度以前の形態を復活させることにしました。声楽と器楽クラスの合同成果発表演奏会については、今年度は12月ではなく1月に催すことにし、1

ゲーム学

「ゲーム学」は、多くの学生にとって親しみのあるデジタルゲームについて、アカデミックな視点から考察することを目的とした講座です。授業は、デジタルゲームだけでなく広くゲームについて、あるいはデジタルゲームと深く関わる最先端の技術要素について、塾内外の専門家が講義を行うオムニバス形式をとっています。履修する学生はただ専門家の話を聞くのではなく、自分が経験的に持つ感覚や他の専門家から聞いた話との関係を意識し、批判的な姿勢でその内容について吟味することが求められます。今年度の履修生数は70名程度と例年に比べて少し少なめでしたが、9割ほどの学生がコンスタントに出席し、講義に耳を傾けて、活発に質疑応答にも参加しました。デジタルゲームは専用のゲーム機を基盤

月12日に実施いたしました。また、昨年度特別企画として、ドイツ政府の助成を受けて来日した、ヴェルニゲローデ放送合唱団青年部との合同演奏会を行いました。2024年度にはそのような機会が無かったため、かえって上記2つの演奏会に集中することができました。ただし、来る2025年度では、10月に再度ヴェルニゲローデ放送合唱団青年部が来日を検討していて、もしかしたらまた合同で演奏会を開くことになるかもしれません。このような国際的な交流は、授業を履修している学生にとってはとても貴重な体験となるので、実現されることを願っています。（石井明）

とするものだけではなく、スマートフォン上で遊ぶものも広く普及しているほか、YouTubeなどではゲームをしている様子を公開したコンテンツなども人気で、その技術的・経済的・文化的なあり方が変化している状況があります。質疑応答でも、そのような変化を踏まえた質問が多くなされていたことが印象的でした。ゲームのような身近な題材をどのように学術研究の対象として扱うことができるのかという挑戦はまさに教養の涵養につながるものであり、来年度以降もこの「ゲーム学」を通じて、多くの学生がそのような挑戦に向き合ってくれることを期待しています。（見上公一）



日吉行事企画委員会（HAPP）企画

ライブラリーコンサート2024秋 Jazz

日吉図書館では、2024年11月11日に6年ぶりとなる秋のライブラリーコンサートを開催しました。星野真志先生（法学部）によるバンドのジャズセッションは、HAPPの活動趣旨にご賛同くださった一流ミュージシャンをAVホールにお迎えして賑やかに行われました。普段教壇に立っている教員がホールに場所を変えて楽器を演奏する姿は、学生にとって大きな刺激となったようです。勉学の他にも好きなことを突き詰め、同じ興味を持つ者同士で高め合い楽しむことは、学生生活や将来のよき参考にもなったことと思います。アンケートには「ジャズを初めて生で聴いた。迫力ある演奏だった。」「ミュージシャンのコミュニ

ケーションのとり方が素晴らしかった。」など、ジャズ初心者を含んだ感動の声が多数寄せられ、また「これから図書館を通じて文化交流ができると嬉しい。」とのコメントもあり、図書館の多岐にわたる可能性を改めて感じる機会となりました。



（日吉メディアセンター 吉沢亜季子）

古楽トークコンサート スペイン中世音楽の楽しみ

2024年10月22日、日吉図書館AVホールで中世イベリア詩歌の名作『聖母マリアの古謡集』（*Cantigas de Santa Maria*, 1270-83）に関する講演と演奏を日吉・三田両メディアセンターの協力を得て実施しました。慶應義塾図書館所蔵の同作品写本（エル・エスコリアル王立修道院図書館 MS T.I.1）ファクシミリ版を展示し、美術面を久米順子氏（東京外国語大学准教授）、時代背景と文学面を瀧本佳容子（商学部教授）が解説した後、古楽バンド「イベロリベロ」が古楽器を使って数曲を演奏し、最後にイベロリベロ、久米氏、瀧本で音楽面に関するトークおよび来場者（45名）との質疑応答を行いました。閉会後も来場者がファクシミリ版と久米氏を取り囲んで活発な対話が続き、アンケート結果の大半で満足したという感想が寄せられるなど、来場者には楽しんでもらえました。

中世ヨーロッパ古楽の生演奏と慶應義塾所蔵資料を直に鑑賞できる機会を学術的・教育的配慮を施して提供することを意図した企画でしたが、教養研究センターおよびメディアセンターの皆様の深い理解と万事にわたるご協力なくしては実現できませんでした。ここに特筆し、あらためて深く感謝申し上げます。

（瀧本佳容子）



古楽トークコンサート スペイン中世音楽の楽しみ
アルフォンソ10世賢王
『聖母マリアの古謡集』



新入生歓迎行事 メイクで探求する個性～自分を引き立たせる技と心～

好評だった2022年、2023年に続いて、2024年度は、12月13日、来往舎大会議室において、「新入生歓迎行事『メイクで探求する個性』」というタイトルで行いました。講師はメイクアップ・アーティストで塾員の松下里沙子さんです。塾生3名がモデルとして協力してくれました。シュウウエムラがメイク材料の協力をしてくださり、関係者も見学に来校してくれました。

今年は、前回の「協生」から進めて、「個性」にフォーカスした講座でしたが、その基本コンセプトとして、多様性を前提としての「個性」の強調があります。個人が持っている様々な属性—ジェンダー、年齢、人種、体格、容姿—は、メイクアップによって超えることができます。まずは、〈心=自己〉を見つめ為して、そこから湧き上がる表現を創ることを目標に、自分に自信が持てるような表現を獲得する手がかりを、講師のレクチャーと実演で得るこ

とができたと思います。

大会議室の入場者は原則として塾生、塾教職員のみとして、約30名の参加が



ありました。顔は表現であると同時に個人情報でもありますので、撮影などは厳禁として、入場者のリストを作成しました。同時に、東通産業の協力で、舞台にスクリーンで投射して後ろに座った参加者にも見えるように工夫しました。男性の参加者は前年からさらに増えてメンズメイクへの関心の高まりも感じさせる講座でした。

（小菅隼人）

「創造力とコミュニティ研究会」

「持続可能性」をテーマとした本年度の「創造力とコミュニティ研究会」は、秋以降5回の研究会を開催しました。テーマは、自然、多様性、生と死、そして自分の持続の4つです。

第25回目（9月24日）は草木染めの染色家の柏崎久恵氏をお迎えし、自然の色彩と植物の力について語っていただきました。柏崎氏は植物を種から育てることでその命を見つめ、染色を生活に取り入れるための教育活動も行っています。今回はキャンパスで染色を行っている学生の参加者も自分の手仕事を持ってきてくれました。

第26回（10月29日）は、多様性に注目したアートを確立し、よりよい生き方を模索するアートチーム、LITTLE ARTISTS LEAGUEの代表理事、ルミコ・ハーモニー氏を迎えて、活動の社会的インパクトについて語っていただきました。

第27回（11月5日）は、「ヨコハマ喫茶去」の名のもとに、研究会そのものを喫茶店にたとえて、コミュニティとしての喫茶店の役割、そして、コーヒー豆のグローバルな流通について考えました。講師に迎えたのは、バリスタのNOZOMI氏。この日はコーヒー豆の流通と持続可能性についても議論しました。そして実際に慶應義塾大学の学生たちもNOZOMI氏の手ほどきで、豆を挽き、コーヒーを入れる経験を行いました。現在は温暖化の影響でコーヒー豆の生産がままならない状況も続いて

います。私たちの日ごろの行いそのものが、作り手の生活を脅かすことにもなりかねないという社会問題も共に考える時間となりました。

第28回（1月28日）は、私たち自身の「生」と「死」のつながりを考える回として、大阪府・能勢妙見山の森で、「循環葬®」という取り組みを始めたat FOREST株式会社代表の小池友紀氏をお迎えして、私たちの身体を自然に戻し、森林保全の一環とする試みについてうかがいました。

本年度最後の第29回（2月11日）の研究会は「砂で描く、私の心」と題して、砂絵のワークショップを行いました。講師はアーティストの「まじあと&こた」のお二人。砂に触れながら、自分の気持ちを自由な絵に描いていく行為は、自分と向き合う時間、自分の持続性を考える時間を提供します。90分のワークショップを通して作品を作り、それぞれが自分と他者の作品について語ることによって、今一人の自分との出会いを果たすワークショップとなりました。

（横山千晶）



教養の一貫教育

舞踏家・上杉満代による舞踏ワークショップ

2024年11月20日、日吉協育棟において、2024年度日吉教育活動等支援予算のプロジェクト事業として、慶應義塾高等学校と共催で、舞踏家上杉満代さんをお招きして身体表現ワークショップを行いました。

2019年度より、教養研究センターでは「高大連携」を重要な事業計画の一つと据えています。その可能性を考える仕組みとして、本プロジェクトでは、慶應義塾高等学校との合意を得て、新たな教養を涵養する教育プログラムを身体表現教育の中で模索しています。言語的および非言語的コミュニケーション力の養成を意図した身体知を視野に入れた教育は、これまで既に教養研究センターの設置科目や、HAPPにおける新入生歓迎

行事（舞踏公演、アート・センターとの共催）でもなされていますが、今回のプランでは、プロジェクトの

対象をより明確に慶應義塾高等学校とし、教養の一貫教育を高大連携という形式で発展させていくことにしました。

当日は、塾高生の参加が多数あり、定員の30名一杯が集まりました。講師の上杉さんは、参加者の感情的負荷を十分考慮して、抑制を効かせつつ、身体を解放するワークショップを行ってくれました。当日は、本塾アート・センターの協力を得ました。

（小菅隼人）



学習相談

日吉メディアセンターでは、レポートの書き方がわからない学生向けに学習相談を行っています。そこではレポートの書き方がわからない、参考文献の書き方がわからない、といった相談を受け付けています。春学期と比べて秋学期は相談件数が少ない傾向にありますが、相談の内容は春学期よりも高度なものが増えます。卒論の相談や引用に関する細かい質問など、学生が自身の問いを発展させて日々学業と向き合う姿勢が相談の内容から感じられます。私自身も過去に論文の書き方を授業を通じて学んできましたが、時間が経つにつれてその記憶は薄れて

いき、回答に苦勞することもあります。しかし、こうした相談を受けることで刺激を受け自分自身の研究へのモチベーションも高まります。このように、学生同士が相互に良い影響を及ぼしている環境に身を置けることに喜びを感じながら、日々デスクに座っています。

（桐生悠雅 商学部3年）

※学年は2024年度時



【全体ガイダンス】
4月2日（水）13：00～14：30
日吉キャンパス独立館DB203

【「学び場」プロジェクト】
4月14日（月）～7月25日（金）
日吉図書館1階スタディサポート

【学会・ワークショップ等開催支援】
「鳥の詩学」シンポジウム
4月26日（土）10：00～17：30
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【HAPP】福澤諭吉と北里柴三郎—近代史上の慶應医学部—
5月10日（土）14：00～16：00
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【情報の教養学】第2回：太田雅文
「TODによるサステナブルな田園都市」
5月14日（水）18：10～19：40
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【HAPP】ライブラリーコンサート2025
5月14日（水）5月16日（金） 日吉図書館

【読書会】「晴読雨読」第15回：若澤佑典
鳥たちの来襲？ 歌声・かたち・移動
5月30日（金）13：30～14：30
日吉キャンパス来往舎103/104

【学会・ワークショップ等開催支援】
第9回総合危機管理学会学術大会
5月31日（土）9：00～18：00
日吉キャンパス来往舎大・中会議室

【HAPP】日吉音楽祭2025
6月29日（日）7月13日（日）
日吉キャンパス協生館 藤原洋記念ホール

【情報の教養学】第3回：伊藤公平
7月9日（水）16：30～18：00
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

庄内セミナー
8月29日（金）～9月1日（月） 山形県鶴岡市

4月

5月

6月

7月

8月

学習相談員による大学生活スタートダッシュ講座：
勉強から課外活動まで

4月3日（木）、4日（金）16：00～17：00
日吉図書館1階ラウンジ

【情報の教養学】第1回：福井健策
「わたしの声はわたしのもの？わたしの顔はわたしのもの？～デジタルレプリカの法律学入門」

4月16日（水）16：30～18：00
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【読書会】「晴読雨読」第14回：若澤佑典
思考のリズム感覚、論理のスタートダッシュ

4月30日（水）13：00～14：00
日吉キャンパス来往舎103/104

【学会・ワークショップ等開催支援】「近代イギリスの動物史 歴史学のアニマル・ターン」ブックトーク
5月11日（日） 日吉キャンパス来往舎中会議室

【学会・ワークショップ等開催支援】
公開シンポジウム「現代ベトナムを知る」
5月14日（水） 日吉キャンパス来往舎大会議室

【学会・ワークショップ等開催支援】フランスにおけるマグレブ系「移民」—アズーズ・ベガークの『シャバの子供』映画上映会と講演会
5月18日（日） 日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【HAPP】新入生歓迎行事 今貂子舞蹈公演
5月21日（水）18：00～

日吉キャンパス来往舎イベントテラス

【学会・ワークショップ等開催支援】第一回 関東観想実践カンファレンス～オートエスノグラフィーと心身変容の交差点～
6月15日（日） 日吉キャンパス

【学会・ワークショップ等開催支援】第33回日本経営倫理学会全国研究発表大会シンポジウム「経営倫理基準としての「利他」の可能性：東洋の経営倫理思想の系譜と稲盛和夫経営哲学」
7月19日（土）～20日（日） 日吉キャンパス来往舎

【みなさんmiraiプロジェクト】宿舎
8月8日（金）～11日（月・祝） 宮城県南三陸町

※活動予定は中止・延期・変更となる可能性があります。

私の「チェーン」自慢

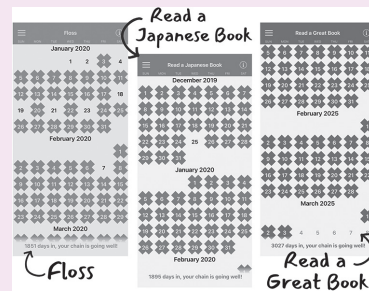
「3052日続けて、毎日Great Book・古典を読んでいます。」こう言うと、ストイックな学者のように聞こえるかもしれませんが、実際は「最低5分」のルールを守っているだけです。2016年11月19日に始めたこの「チェーン」は、「Don't break the chain! チェーンを切るな!」をモットーに、一日も欠かさず続けています。この春、私は55歳の誕生日を迎えますが、その日でちょうど3052日連続達成となります。

日本語の本を読むチェーンもちょっとした自慢です。2019年のクリスマスにうっかり切ってしまいましたが、その日を除けば3051日連続となります。そのおかげで日常会話や仕事だけでは出会えなかった言葉やストーリーにインスパイアされてきました。

実は、他にもいくつかのチェーンがあります。例えば、腕立て伏せのチェーンは307日連続。フロスのチェーンは1876日継続…おかげで歯科衛生士に褒められています。日本語の新聞に毎日、目を通すチェーンは2688日継続（ほぼ見出しだけの日もあります）。

このチェーン・システムは目に見えるゲームのような形になっていますので、「おお、ここまで続いたんだ、よくやってきたな!」と自画自賛したりしています。どこまで続けるのか分かりませんが、楽しく継続できたらと思います。

（ショート ジョン ランドル）



Newsletter
May, 2025. No.46

慶應義塾大学教養研究センター（Keio Research Center for the Liberal Arts）

発行日：2025年5月15日 代表：片山杜秀

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1 TEL: 045-566-1151 Email: lib-arts@adst.keio.ac.jp

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>